論　文

電気学会論文誌 LaTeX スタイルファイル ieej.sty （Version 1.0）の使い方

正　員　電　子　太　郎　（電子大学）
非会員　電　気　花　子　（電気大学）

How to Use a LaTeX Style File (`ieej.sty`) for the Transaction of The Institute of Electrical Engineers of Japan

Denshi Taro, Member (Denshi University), Denki Hanako, Non-member (Denki University)

IEE Japan provides a LaTeX style file, named `ieej.sty` (Version 1.0), for the Transaction of The Institute of Electrical Engineers of Japan. This document describes how to use the style file, and also makes some remarks about typesetting a document by using LaTeX. It is fundamentally designed based on ASCII Japanese TeX, but also designed for using NTT jTeX.

キーワード：スタイルファイル，アスキー版日本語 TeX，NTT 版jTeX

1．はじめに

このスタイルファイルは，アスキー版日本語 TeX を元に作成しました。NTT 版jTeX でも使用できますが，zw という単位が使えないバージョンには対応していません。

このスタイルファイルは LaTeX Version 2.09 に基づいており，LaTeX 2$_\varepsilon$ や NFSS（New Font Selection Scheme）には対応していません。

スタイルファイル作成にあたっては，以下のバージョンで動作確認をしました。

アスキー版 BigTeX, C Version 2.99 - j1.7 - p1.0
アスキー版 pTeX, C Version 2.99 j1.7 p1.0.9G
NTT 版　JTeX, Version 1.12,
　　based on TeX C Version 2.95

コンパイルに必要なスタイルファイルは，`ieej.sty` のみです。なお，この文書自身が `ieej.sty` を使用した場合の出力サンプルとなっています。

2．スタイルファイルの使い方

本誌の組版体裁に従って，各種パラメータと出力形式を変更しています。したがって，レイアウトにかかわるパラメータは絶対に変更しないでください。

〈2·1〉 テンプレートならびに記述方法　「論文」，「研究開発レター」，「英文論文」，「解説」のタイプ別によって，記述の仕方が若干異なります。

まず，「論文」タイプから順に説明します。

〈2·1·1〉「論文」タイプの記述方法

```
\documentstyle{ieej}
\FIELD{A}
\YEAR{1995}
\NO{9}
\jtitle{和文タイトル}
% \jtitle[柱用タイトル]{和文タイトル}
\etitle{英文タイトル}
\authorlist{%
 \authorentry{日本語名}{ローマ字名}%
  {メンバーシップ}{ラベル}
}
\affiliate[ラベル]{和文所属}{英文所属}

\received{7}{1}{1}
\revised{7}{1}{1}

\begin{document}
\begin{abstract}
abstract in English
----（略）----
\end{abstract}
\begin{keyword}
キーワード
\end{keyword}
\maketitle
```

```
\section{はじめに}

---- （略） ----

\begin{thebibliography}{99}
\bibitem{}
\bibitem{}
---- （略） ----
\end{thebibliography}

\appendix
\section{}

---- （略） ----

\begin{biography}
\profile{メンバーシップ}{日本語名}{%
著者のプロフィール
}
\end{biography}

\end{document}
```

以下，記述方法を説明します。

- `\FIELD` は部門別の指定です。`\FIELD` の引き数として，
  「基礎・材料・共通部門」は `A` を，
  「電力・エネルギー部門誌」は `B` を，
  「電子・情報・システム部門誌」は `C` を，
  「産業応用部門誌」は `D` を，
  「センサ・マイクロマシン部門誌」は `E` を，
  それぞれ指定してください。
- `\YEAR` は `\YEAR{1995}` のように西暦を指定してください。`\YEAR{1995}` でも `\YEAR{95}` でもかまいません。
- `\NO` は `NO\{9}` のように月をアラビア数字で指定してください。
- `\YEAR`，`\NO` については，投稿論文がいつ掲載されるか著者にはわからないため，本スタイルファイルとともに配布される `template.tex` に記述されているものを便宜的に使うか，コマンドをコメントアウトしてください。
- `\jtitle` には論文のタイトルをタイプしてください。任意の場所で改行したい場合には，`\\` で改行してください。

  `\jtitle` の引き数は柱（ヘッダー）にも出力されます。タイトルが長すぎて柱がはみ出す場合（ワーニングが出力されます）には，`\jtitle[柱用タイトル]{タイトル}` という形式で柱用に短いタイトルを指定してください。
- `\etitle` には欧文タイトルをタイプしてください。引き数が柱には出力されないため，`\etitle[柱用タイトル]{タイトル}` という使い方はできません。
- 著者のリストを出力するには，以下のように記述してください。著者名，所属などの出力体裁が自動的に整えられます。

  基本的なスタイルは

```
\authorlist{%
 \authorentry{名前}{ローマ字名}
  {メンバーシップ}{ラベル}
 \authorentry{名前}{ローマ字名}
  {メンバーシップ}{ラベル}
}
```

という形です。例えば，次のように記述してください。

```
\authorlist{%
␣\authorentry{電子␣太郎}{Denshi␣Taro}
␣␣{m}{Tokyo}
␣\authorentry{電気␣花子}{Denki␣Hanako}
␣␣{n}{Osaka}
}
```

著者のリストを `\authorentry` に記述し，リスト全体を `\authorlist` の引き数にします。

- ○ 第 1 引き数は著者の日本語名を指定します。姓と名の間には必ず半角のスペースを挿入してください（スペースを挿入し忘れた場合には，ワーニングが出力されます）。
- ○ 第 2 引き数は著者のローマ字名を指定します。スペルの最初の文字は大文字で記述してください。
- ○ 第 3 引き数は著者のメンバーシップの別を記述します。

  第 3 引き数に指定できる文字は，`m`，`s`，`a`，`l`，`n` のうちのいずれか 1 つです。この場合，引き数の前後に余分なスペースを入れないでください。`{m}` と `{m␣}` は違うものとして判断します。

  これらのうちのどれかを指定すると，メンバーシップの別が著者リストに出力されます（下表参照）。

m ember	正員	Member
s tudent member	学生員	Student Member
a ssociate member	准員	Associate
l ife member	終身会員	Life Member
n onmember	非会員	Non-member

左欄は指定する文字，中欄は「英文論文」以外のタイプの場合，右欄は「英文論文」の場合

- ○ 第 4 引き数は著者の所属ラベルを指定します（後述する `\affiliate` コマンドの第 1 引き数に対応しています）。ラベルは大学名，企業名，地名などを表す簡潔なものにしてください。この場合も，引き数の前後に余分なスペースを入れないでください。

`\authorentry` には著者を何人でも指定することができます[†]。

- 著者の所属は `\affiliate` に指定します。基本的なスタイルは

  `\affiliate[ラベル]{和文所属}{英文所属}`

  という形です。

  第 1 引き数に `\authorentry` で指定したラベルに対応するラベルを指定します。第 2 引き数に和文の所属を，第 3 引き数に英文所属を指定してください。この場合も，ラベルの前後に余分なスペースを挿入しないでください。`\authorentry` に記述したラベルの出現順に記述するようにしてください。
- `affiliate` のラベルが，`\authorentry` で指定したラベルと対応しないときは，ワーニングメッセージが端末に出力されます。
- `\received{}{}{}`，`\revised{}{}{}` には，受付，再受付の日付をタイプしてください。それぞれ 3 つの引き数をとり，前から順に年（西暦ではなく元号），月，日の数字をタイプします。

  次のように記述すれば

  ```
  \received{7}{7}{20}
  \revised{7}{9}{18}
  ```

  文献リストの前に（文献リストがない場合は，著者紹介の前に）

  （平成 7 年 7 月 20 日受付，同 7 年 9 月 18 日再受付）

  と出力されます。

  欧文の要約は，`abstract` 環境の中に，キーワードは，`keyword` 環境の中に記述してください。
- これらのコマンドを指定した後，`\maketitle` を置いてください。
- `\appendix` は，LaTeX 標準のスタイルではセクション番号をアルファベットにして，カウンターをリセットしますが，このスタイルファイルでは，“付録” という見出しを出力します。

  数式番号は “(付 1)” となります。たとえば，任意の式にラベル付けし，式 (`\ref{eq:app}`) と相互参照すれば “式 (付 1)” と出力されます。

  図表のキャプションは，たとえば図の場合には，“付図 1”，“app. Fig. 1” と出力されます。
- 著者のプロフィールを出力するには，`biography` 環境の中で `\profile{}{}{}` コマンドを使用してください。第 1 引き数には正員，非会員などの別を，第 2 引き数には名前を，第 3 引き数には略歴を，それぞれタイプしてください。

  ```
  \profile{m}{電子 太郎}{19xx 年生。
  19xx 年 xx 月 XX 大学工学部電気科卒業。
  ----　（略）　----
  }
  ```

  写真を省略する場合には，`\profile*{}{}{}` コマンドを使用してください。
  - ○ 第 1 引き数に指定する文字は，`m`，`s`，`a`，`l`，`n` のうちのいずれか 1 つです。これらのうちのどれかを指定すると，下の表の右欄に示した文字が名前の右に出力されます。

m	（正員）	(Member)
s	（学生員）	(Student Member)
a	（准員）	(Associate)
l	（終身会員）	(Life Member)
n	（非会員）	(Non-member)

左欄は指定する文字，中欄は「英文論文」以外のタイプの場合，右欄は「英文論文」の場合

  - ○ 第 2 引き数の名前は，姓と名の間に半角スペースを必ず入れてください。

〈2·1·2〉「研究開発レター」タイプの記述方法　ドキュメントスタイルのオプションとして `letter` を指定してください。これ以外は「論文」タイプと同じです。

```
\documentstyle[letter]{ieej}
----　（略）　----
```

〈2·1·3〉「英文論文」タイプの記述方法　ドキュメントスタイルのオプションとして `english` を指定してください。「論文」タイプの記述方法と異なるのは，

`\title`
`\authorentry`
`\affiliate`
`\caption`（〈2·6〉節参照）

コマンドです。

```
\documentstyle[english]{ieej}
----　（略）　----
\title[柱用和文タイトル]{英文タイトル}
\authorlist{%
 \authorentry{ローマ字名}{メンバーシップ}{ラベル}
}
\affiliate[著者のラベル]{英文所属}
----　（略）　----
```

- タイトルは `\title` コマンドを使います。この場合，柱は和文にする必要があるので，必ず `\title[柱用和文タイトル]{英文タイトル}` と記述してください。
- 著者リストの記述方法は，「論文」タイプの場合と基本的に同じですが，異なるのは，和文の名前を出力する必要がないため引き数が 3 つになる点です。

[†] 「英文論文」の場合には 20 人，それ以外のタイプの場合には，7 人をそれぞれ超えると，著者リストを 2 段で組む仕様にしています。ただし，著者の所属を指定する文字が多すぎる場合，著者のリストが長くなりすぎて，うまく組まれない可能性があります。こういう場合には，著者の所属を簡潔な短いものに変更するか，プリアンプルで `\onecolumnlimit{10}` と指定してください（これは，10 人までは 1 段で組むということを意味します）。

```
\authorlist{%
 \authorentry{ローマ字名}{メンバーシップ}
  {ラベル}
 \authorentry{ローマ字名}{メンバーシップ}
  {ラベル}
}
```

例えば，次のように記述します。

```
\authorlist{%
\authorentry{Denshi Taro}{m}{Tokyo}
\authorentry{Denki Hanako}{n}{Osaka}
}
```

- 著者の所属の記述方法も「論文」タイプの場合と基本的に同じですが，異なるのは，和文所属を出力する必要がないため引き数が 2 つになる点です。
  `\affiliate[ラベル]{英文所属}`
  という形です。

〈2·1·4〉「解説」タイプの記述方法　ドキュメントスタイルのオプションとして comment を指定してください。「論文」タイプの記述方法と異なるのは，
\jsubtitle
コマンドと abstract 環境です。

```
\documentstyle[comment]{ieej}
---- （略） ----
\jtitle{タイトル}
\jsubtitle{サブタイトル}
\etitle{英文タイトル}
---- （略） ----
```

- 「解説」タイプの場合には，柱に“解説”と出力されるため，「論文」タイプのように \jtitle[柱用タイトル]{タイトル} と記述する必要はありません。
- サブタイトルが必要な場合は，\jsubtitle コマンドを利用してください。
- abstract は必要ありません。

出力の体裁として，「論文」タイプと異なるのは以下の点です。

- \etitle は脚注部分に出力されます。
- \authorentry の第 2 引き数と \affiliate の第 3 引き数は脚注部分に出力されます。

なお，「特集解説」の場合は，ドキュメントスタイルのオプションとして comment とともに feature を指定してください。

```
\documentstyle[comment,feature]{ieej}
---- （略） ----
```

〈2·2〉セクションの字どり　\section の場合，その見出しが 4 字以下の場合 5 字どりに，\subsection の場合，その見出しが 3 字以下の場合 4 字どりになるように設定しています（1，〈2·8〉節参照）。

〈2·3〉数式について　本誌のディスプレー数式は，数式と数式番号をドットでつなぐため，dot-eqns.sty を組み込んでいます(9)(14)。

数式の頭は左端から 2 字下げのところに，数式番号は右端から 1 字入ったところに出力されます。この設定を前提に数式の折り返しを調整してください。

たとえば，

```
\begin{eqnarray}
\lefteqn{ \int\!\!\!\int_S
 \left(\frac{\partial V}{\partial x}
 -\frac{\partial U}{\partial y}\right)
 dxdy} \quad\nonumber\\
 &=& \oint_C \left(U{dx \over ds}
      + V{dy \over ds}\right)ds
\end{eqnarray}%
```

と記述すれば，

$$\begin{aligned}&\iint_S \left(\frac{\partial V}{\partial x}-\frac{\partial U}{\partial y}\right)dxdy\\ &\quad=\oint_C \left(U\frac{dx}{ds}+V\frac{dy}{ds}\right)ds \cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots \end{aligned}\tag{1}$$

と出力されます。

本誌の場合，2 段組みで 1 段の左右幅がせまいため，数式と数式番号が重なったり，数式がはみ出したりすることが頻繁に生じると思われるので，Overfull \hbox のメッセージには特に気をつけてください。

〈2·4〉\newtheorem について　LaTeX の標準とは異なって，環境の上下の空き，インデントを変え，また見出しもゴシックにせず，環境中の欧文もイタリックにならないように設定しています。

たとえば，

```
\newtheorem{teiri}{定理}
\begin{teiri}
$n>2$ に対しては，
方程式 $x^n + y^n = z^n$ の
自然数解は存在しない
（Fermat's last theorem）。
\end{teiri}
```

と記述すれば，

【定理 1】 $n > 2$ に対しては，方程式 $x^n + y^n = z^n$ の自然数解は存在しない（Fermat's last theorem）。

と出力されます。

〈2·5〉脚注について　脚注マークは，カウンターが進むごとに「†，††，†††」となります（3 ページ参照）。新しいページになっても，カウンターは進まずリセットされます。

〈2·6〉図表について　「英文論文」以外の場合，図表のキャプションを和文と欧文で指定する必要があるため，欧文用のキャプションを指定する \ecaption というコマ

```
\begin{figure}[tbp]
%\capwidth=50mm
%\ecapwidth=60mm
\vspace{45mm}
\caption{これは和文キャプションの例です。}
\label{fig:1}
\ecaption{An example of caption
in English.}
\end{figure}
```

図 1　これは和文キャプションの例です。
Fig. 1.　An example of caption in English.

表 1　これは表の例です。
Table 1.　An example of table caption in English.

A	B	C
X	Y	Z

```
\begin{table}[b]%[tbp]
\caption{これは表の例です。}
\label{table:1}
\ecaption{An example of table caption in English.}
\begin{center}
\begin{tabular}{c|c|c}
\hline
A & B & C\\
\hline
X & Y & Z\\
\hline
\end{tabular}
\end{center}
\end{table}
```

ンドを用意しました。使い方は `\caption` と同じです。図 1 のようにタイプしてください。

「英文論文」の場合のキャプションは，`\caption` コマンドのみ使用してください。

キャプションの幅はデフォルトで，1 段の図の場合は 72mm に，2 段ぬきの図の場合はテキストの幅の 0.8 倍にしていますが，`float` 環境の中で `\capwidth` および `\ecapwidth` に数値を指定すれば，その幅でキャプションを折り返すことができます。

図表の出力位置を指定するオプションとして，`[h]` は使わず，`[t]`，`[b]`，`[tbp]` などを指定して，ページの天か地に出力させるようにしてください。

〈2·7〉　文献の引用と `thebibliography` 環境　　文献引用の `\cite{}` は，`citesort.sty` および `cite.sty` を手直ししたものを組み込んでいます。例えば，`\cite{Bech,Gr,itou,ohno,nodera1,Abrahams,tex}` と記述すれば，次のように，番号が続く場合は省略し，番号順に並べ変えます(1)~(3)(6)(17)~(19)。

本文中で「文献 (1) を参照」のように，肩付きではなく，文章中に文献番号を出す場合は，「文献 `\Cite{tex}` を参照」と記述してください。

`thebibliography` 環境については，著者名，文献名，ジャーナル（出版社），発行年など，イニシャル，略語のスタイル，順番などは本誌の規則に従ってください。

表 2　`\RN` と `\FRAC`
Table 2.　`\RN` and `\FRAC`

`\RN{2}`	II
`\RN{117}`	CXVII
`\FRAC{$\pi$}{2}`	$\pi/2$
`\FRAC{1}{4}`	$1/4$

今のところ BibTeX 用のスタイルファイルは作成していません。

〈2·8〉　そ の 他

〈2·8·1〉　`ieej.sty` で定義しているマクロ

- 「証明終」を意味する記号 □ を出力するマクロとして `\QED` を定義してあります(1)。`\hfill$\Box$` では，この記号の直前の文字が行末に来る場合，記号が行頭に来てしまいますので，`\QED` を使ってください。
- `\onelineskip`，`\halflineskip` という行間スペースを定義しています。その名の通り，1 行空け，半行空けに使ってください。和文の組版の場合は，こうした単位の空け方が好まれます。
- このスタイルファイルでは表 2 のように，`\RN{}`(1)(18) と `\FRAC{}{}`(1)(5) というマクロを定義しています。
- 2 倍ダッシュの “——” は，`\doubledash` というマクロを使ってください。—を 2 つ重ねると，—と—の間に若干のスペースが入ることがあり見苦しいからです。
- このほかに，`\MARU`(5)，`\kintou`(5)，`\ruby`(5) を組み込んでいます。使い方については参考文献を参照してください。

〈2·8·2〉　`\flushbottom` について　　スタイルファイルでは `\flushbottom` を指定してあります。したがって，本文領域の左右 2 段の下が揃います。

〈2·8·3〉　AMS-LaTeX について　　AMS-LaTeX を使う場合には，

```
\documentstyle[amstex]{ieej}
```

などとして `amstex.sty` をスタイルオプションとして読み込ませるかたちにしてください(7)(19)。

3.　タイピングの注意事項

(1)　和文の句読点は，“，” “。”（全角記号）を使用してください。和文中では，欧文用のカンマ “,”（半角）は使わないでください。

(2)　括弧類は，和文中で欧文を括弧でくくる場合は全角の括弧を使用してください。欧文中ではすべて半角ものを使用してください。

例：スタイル（Style）ファイル / some (Style) files

上の例にように括弧のベースラインが異なります。

(3)　ハイフン（-），二分ダッシュ（--），全角ダッシュ（---）の区別をしてください。ハイフンは，well-known など一般的な欧語の連結に，二分ダッシュは，

電話番号や pp.298–301 のように範囲を示すときに使用してください。全角ダッシュは，欧文用の em-dash（—）で，次のような場合に使用してください。

The em-dash is even longer—it's used as punctuation, as in this sense, and you get it by typing `---`.(15)

(4) 全角ダッシュよりも長い 2 倍ダッシュ"——" については，〈2・8・1〉節を参照してください。

(5) アラインメント以外の場所で，空行を広くとるため，`\\` による強制改行を乱用するのはよくありません。

空行の直前に `\\` を入れたり，`\\` を 2 つ重ねれば，確かに縦方向のスペースが広がりますが，
`Underfull \hbox (badness 10000) ....`
というメッセージがたくさん出力されてしまい，重要なメッセージを見落としがちになってしまいます(8)。`\par\noindent`，`\hfil\break`，〈2・8・1〉節のような使い方をしてください。

(6) （␣`word`␣）のように "（ ）" 内や "( )" 内の単語の前後にスペースを入れないでください。

(7) 本誌は，アスキー版日本語 TEX でコンパイルして最終版下を作成するため，ギリシア文字の α，β などについては，その前後に "，" "。" "（" "）"（全角 JIS 記号）がくる場合を除いて半角のスペースを入れるように心掛けてください。

`ギリシア文字の$\alpha$，$\beta$については`

⇒ ギリシア文字のα，βについては

（アスキー版日本語 TEX を使ってコンパイルする場合，スペースを入れないとギリシア文字と全角文字の間がつまりぎみになります）

`ギリシア文字の␣$\alpha$，$\beta$␣については`

⇒ ギリシア文字の α，β については

(8) プログラムリストなど，インデントが重要なものは，力わざ（`\hspace*{??mm}` の使用や `\\` などによる強制改行）で整形するのではなく，`list` 環境や `tabbing` 環境などを使って赤字が入っても修正がしやすいように記述してください。

(9) 数式モードの中でのハイフン，二分ダッシュ，マイナスの区別をしてください。

例えば，

`$A^{{\rm b}\mbox{\tiny -}{\it c}}$`

$A^{\mathrm{b}\text{-}c}$ ⇒ ハイフン

`$A^{{\rm b}\mbox{\tiny --}{\it c}}$`

$A^{\mathrm{b}\text{–}c}$ ⇒ 二分ダッシュ

`$A^{{\rm b}-{\it c}}$`

$A^{\mathrm{b}-c}$ ⇒ マイナス

となります。それぞれの違いを確認してください。

(10) 数式の中で，`<,>` を括弧のように使用することがよくみられますが，数式中ではこの記号は不等号記号として扱われ，その前後にスペースが入ります。このような形の記号を括弧として使いたいときは，`\langle,\rangle`（$\langle$，$\rangle$）を使うようにしてください。

(11) 複数行の数式でアラインメントをするときに数式が $+$ または $-$ で始まる場合，$+$ や $-$ は単項演算子とみなされます（つまり，$+x$ と $x+y$ の $+$ の前後のスペースは変わります）。したがって，複数行の数式で $+$ や $-$ が先頭にくる場合は，それらが 2 項演算子であることを示す必要があります(4)。

```
\begin{eqnarray}
y &=& a + b + c + ... + e\\
  & & \mbox{} + f + ...
\end{eqnarray}
```

(12) TEX は，段落中の数式の中（`$...$`）では改行をうまくやってくれないことがあるので，その場合には `\allowbreak` を使用することを勧めます(17)。

4. ソース・ファイル提出について

(1) ソース・ファイルはメインのファイルに `\input` するのではなく，1 本のファイルにまとめてください。

(2) 著者独自のマクロなど，コンパイルに必要なソース・ファイルは必ずコピーしてください。スタイルファイルも特殊なものはコピーしてください。

(3) フロッピーのフォーマットは，MS-DOS または Mac でお願いします。

(4) PostScript で記述した図のソースファイルも必ずコピーしてください。

（平成 7 年 7 月 20 日受付，同 7 年 9 月 18 日再受付）

文　　献

(1) D.E. クヌース：TEX ブック（1989）アスキー出版局
(2) 大野義夫編：TEX 入門（1989）共立出版
(3) 野寺隆志：楽々LATEX（1990）共立出版
(4) レスリー・ランポート：文書処理システム LATEX（1990）アスキー出版局
(5) 奥村晴彦：LATEX 美文書作成入門（1991）技術評論社
(6) 伊藤和人：LATEX トータルガイド（1991）秀和システムトレーディング
(7) 野寺隆志：今度こそ$\mathcal{AMS}$-LATEX（1991）共立出版
(8) 磯崎秀樹：LATEX 自由自在（1992）サイエンス社
(9) 古川徹生・岩熊哲夫：LATEX のマクロやスタイルファイルの利用（styleuse.tex）（1993）
(10) 藤田眞作：化学者・生化学者のための LATEX—パソコンによる論文作成の手引（1993）東京化学同人
(11) 鷺谷好輝：日本語 LATEX 定番スタイル集（1992–1994）インプレス
(12) 奥村晴彦監修：LATEX 入門—美文書作成のポイント（1994）技術評論社
(13) 阿瀬はる美：てくてく TEX（1994）アスキー出版局
(14) 高山健三："Inside DVI→PS"（1994–1995）UNIX MAGAZINE
(15) R. Seroul & S. Levy: A Beginner's Book of TEX (1989) Springer-Verlag
(16) V. Eijkhout: TEX by Topic (1991) Addison-Wesley
(17) P.W. Abrahams: TEX for the Impatient (1992) Addison-Wesley

(18) S. von Bechtolsheim: TeX in Practice (1993) Springer-Verlag

(19) G. Grätzer: Math into TeX – A Simple Introduction to AMS-LaTeX (1993) Birkhäuser

(20) H. Kopka & P.W. Daly: A Guide to LaTeX (1993) Addison-Wesley

(21) M. Goossens, F. Mittelbach & A. Samarin: The LaTeX Companion (1994) Addison-Wesley

(22) N. Walsh: Making TeX Work (1994) O'Reilly & Associates

付録

スタイルファイルから削除したコマンド

本誌の投稿論文作成に必要ないコマンドは本スタイルファイルから削除しました。削除したコマンドは，

```
\tableofcontents
\titlepage
\part
\theindex
\ps@headings
\ps@myheadings
```

とこれらに関連したコマンドなどです。

電子太郎 （正員） 19xx 年生。19xx 年 xx 月 XX 大学工学部電気科卒業。19xx 年同大学助手。19xx 年同講師。19xx 年同助教授。工学博士。主として XX に関する研究に従事。

電気花子 （非会員） 19xx 年生。19xx 年 xx 月 XX 大学工学部電気科卒業。19xx 年 XX （株）に入社。19xx 年同社 XX 研究所所長。現在，XX に勤務。